

永平寺門前：道元禅師御歌碑の内容①

永平寺への参道には、日本の曹洞宗の開祖である道元禅師（1200–1253）によって詠まれた九首の和歌が刻まれた石碑が点在している。和歌は参詣者に禅の心を思い起こさせ、仏教の教えを日常生活に取り入れることを奨励している。和歌は 5、7、5、7、7 の 5 行に分割された 31 文字で構成されている。

#1

最初の歌碑は、永平寺町営の第一駐車場の角にある。

水鳥のゆくもかえるも跡絶えてされどもみ道は忘れざりけり

水鳥は来るときも去るときもその波紋を残さないが、進んでいるときでも自分の行く道を忘れない

説明：アヒルやガチョウのように波紋を立てずに水面を滑るのはとても気持ちよさそうだが、彼らは水面下で常に足で漕いでおり、彼らは自分の行き先を見失うことはない。

#2

二番目の歌碑は、永平寺の入り口のすぐ外にあり、寺の名前が刻まれた背の高い石碑の台座の隣にある。

濁りなき心の水にすむ月は波もくだけて光とぞなる

波が砕け散り光がきらめく淡い月は、海の上にあり純粹である

説明：坐禅で瞑想をしているとき、心は穏やかで、月の光を反射する静かな池のように気を散らしてはいけない。

#3

3 番目の歌碑は、越前地方（福井県）の伝統工芸品を販売している瓦葺のギャラリー寧波の前の庭園にある。

冬草もみえぬ雪野のしらさぎはおのが姿に身をかくしけり

枯れた草すら見えない雪原にたたずむ白鷺はその姿を隠している

説明：野原に一羽で立っている白鷺は、雪景色のなかで全く識別できない。同様に、達磨禅師の信者は仏と一体になるまで心を入れて礼拝を行わねばならない。